

書 評

内海健寿

イギリス・メソジズムにおける倫理と経済

(キリスト新聞社、2003年)

石田 聖実

本書は会津大学短期大学部名誉教授で日本ウェスレー・メソジスト学会会員の内海健寿氏がこれまでに発表された4つの論文を1冊にまとめて、本年6月に出版されたものである。

全体の構成は

イギリス・メソジズムにおける倫理と経済

イギリス労働階級に対するメソジストの社会経済的貢献

メソジズムの薫陶を受けた労働運動家たち

イギリスにおけるメソジズムと労働運動

あとがき ジョン・ウェスレーの後世に与えた影響  
となっている。

世界史や経済の書物を読んでいてしばしば感じることは、個々の労働者の労働意欲やモラルといったことにはあまり言及されず、もっぱら体制やシステムにのみ記述が割かれることである。現実の生産現場や商取引では職務に対する責任や品質維持のための個々の労働者の熱心さとか、顧客との信頼関係が極めて重視され、それが数字に大きく作用することは周知の通りである。本書は18～19世紀のメソジスト運動が人々の信仰を変え、生活態度を変革

し、それが英国経済にどう影響したかを具体的に資料からあとづけている。

「イギリス・メソジズムにおける倫理と経済」では「メソジズムは労働者に人格の復権を体験させ、独立の精神を育成した」とする。メソジズムが浸透したのは主として坑夫、製鉄工、機織、熟練職人、日雇い労働者たちであったが、新しい産業に集まった人々 - 古くからの土地や宗教的束縛から離れた人々 - の心を捉えた。続いてその人々がメソジズムに触れたことによってどうなったかが列挙される。「零落した心の人、卑しい汚い心...」だった人が「自尊心、自立心を確立して、公的援助を拒否」するようになったという人格確立。大勢いた酔っぱらいの減少や賭博場の廃止など道徳的品性の変化。酒場や賭博場の代わりにチャペルへ（酒と博打で憂さを晴らすことから神賛美の生活へ）。労働意欲の増大、責任感...メソジストの労働者は経営者たちから信頼され、監督を任されるようになっていった。こうしたメソジストの姿にはピューリタニズムの影響が見られると指摘されている。

著者は、メソジズムの影響を受けた人物としてベンジャミン・フランクリンと大原孫三郎を挙げている。フランクリンは十三徳や「時は金なり」の格言で有名だが、その精神はウェスレーの十二則に通じるものがあると指摘する。また大原孫三郎についても実業家として成功するだけでなく、その利益を石井十次の岡山孤児院の支援、病院、研究所、美術館などを設立し、社会に還元していったことを評価し、「できる限り利益し...できる限り与えよ」というウェスレーの精神に則ったものだとしている。我々はともするとメソジストの精神はメソジスト派の中だけに見ようと限定しがちであるが、著者はメソジスト派に限定せず、広くウェスレーの精神に動かされた者を見いだそうとしている。

「イギリス労働階級に対するメソジストの社会経済的貢献」では産業革命とメソジズムが密接に関連していたことが述べられる。すなわちメソジズムは産業革命によって勢力を拡大し、産業革命もメソジズムによって発展した。19世紀前半のメソジスト諸派の拡大ぶりが統計によって示されている。さらにウェスレー自身はトーリー的であり、民主主義的とは言えないにもかかわらず、メソジストが民主主義を生み出し発展させる原動力になっていったことが述べられている。この関係について著者はクロムウェルについての

矢内原忠雄の記述「彼は政治的自由よりも宗教的自由をもってより根本的と考えた...彼の政府は独裁の形態をとりましたが、彼の精神はあくまで民主的でありました...」を引用しながら「ウェスレー・メソジズムの中には17世紀クロムウェルのピューリタン精神が流れているのではあるまいか...営利欲をみごとに否定したピューリタニズムが、かえって資本主義精神の生誕にあずかって力があつたというこの歴史の逆説に注目しなければならないであろう」と論じている。そしてメソジストの教理の実践は必然的に民主主義にいたるものであつたことを強調している。同様に回心者の生活がどのように変化していったかもキングスウッドとニューカッスルの炭坑夫たちのケースを例に触れられている。もう一つ現代の教会に生きる我々に対して著者は次のような指摘をしている。メソジストは信徒を説教に起用し、わかりやすい賛美歌で礼拝を活気あるものにした。今日も若者たちが多く集まる教会はそういう教会ではないだろうか。

メソジズムを受容した人々の多くは社会の中の下層の労働者であつて、資本家たちではなかつた。このことはメソジズムから生まれてくるものをある程度規定するであろう。「メソジズムの薫陶を受けた労働運動家たち」ではメソジストから何人もの労働運動家が出て、彼らは革命家としてではなく福音の信仰に立脚して「人格的、政治的、社会的、宗教的、道徳的、精神的」に労働者のために働いたことを指摘している。

「イギリスにおけるメソジズムと労働運動」では更に踏み込んで、「英国労働党の指導者の人格形成への準備」というサブタイトルが付けられている。メソジズムは何よりも実践的であつた。著者はウェスレーの日記の次の言葉に注目する。「聖餐式への集積、教会秩序の厳守、熱心なる聖書研究、眠りや世俗的娯楽を避けて、時間を宗教的訓練にささげること、- これらのことは、無価値というわけではないが、実際の宗教と比較する時、ほとんど重要ではなかつた。実際の宗教は、毎日、貧しい人や罪人や瀕死の者を世話したのであつた。オックスフォード・メソジズムは、激しく、実践的であつた」。善きサマリア人の譬えを思い起こさずにはいられない。こうしたことからメソジズムは礼拝をチャペルに基盤を持ちつつ、そこに留まらず社会に出て行って現実の人々の叫びに答えていった。そして、そのような人格を形

作っていた。

本書はメソジストがあくまでも福音的な信仰理解に立ちつつ、その必然的結果として産業革命期の社会の諸問題に対して積極的に取り組み、底辺の人々の信仰、教養、健康、労働意欲...あらゆる面に感化して人を作りかえ、社会を作りかえていったことを明らかにしている。同時に著者はそれを18～19世紀英国だけに限定しないで、メソジストの精神がアメリカにも日本にも伝わって受け継がれていることを見ている。ウェスレーの伝統を自任する教会はこのことをしっかり受け止めたいものだ。

なお、海外の参考文献の引用で、翻訳文のこなれていない部分が見られたのは残念である（例えば p11「説教のハウス」、p44「この基金の維持のために1年間に1週1ペニを与えなければならない」など）。用語関係では「メソジスト」と「メソジズム」の使い分けの基準がよくわからなかった。「メソジスト」と言うべきところがほとんど「メソジズム」と言われていた、と筆者は感じた。もう1点、本書は「イギリス・メソジズム」を取り扱っている書物であるが、カバーにはアメリカのUnited Methodist Churchのシンボル（Cross and Flame）が使用されているのは不適切であろう。

（日本基督教団尾陽教会牧師）